

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	大阪市立大学	拠点番号	D14
申請分野	人文科学		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	都市文化創造のための人文科学的研究 Studies in the Humanities for the Development of Urban Cultural Creativity		
研究分野及びキーワード	<研究分野: 史学> (文化交流史)(異文化コミュニケーション)(生活様式) (宗教社会学)(芸能・芸術研究)		
専攻等名	文学研究科 哲学歴史学専攻 人間行動学専攻 言語文化学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 阪口 弘之 教授 他 17名		

拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成16年1月現在)を抜粋

<本拠点がカバーする学問分野について>

本拠点は「都市文化学」という新しい学問分野の確立をめざしている。本拠点のめざす「都市文化学」とは、それぞれの都市のもつ文化の伝統を明らかにするとともに、より豊かな市民生活に向けての新たな文化創造をめざして、人文科学の広い分野が共同で行なう総合的な学問である。いうまでもなく、現代都市が抱える諸問題は世界に共通するものであり、「都市文化学」は国際的な研究交流を通じて追求されるべき学問分野である。

<本拠点の特色及びその目的等>

「都市文化研究センター」は、新たな学問分野である「都市文化学」の研究教育拠点として、大阪・日本の都市文化のみならず、世界各都市の都市文化の研究者、若手研究者が交流する国際的な研究教育センターである。本拠点の研究教育事業は、海外の諸都市に設置された研究拠点(サブセンター)との連携のもとに行なわれ、相互交流のなかで内外の若手研究者を育成するなど、国際的な視点から推進される。

<COEを目指すユニーク性>

- 1) 本拠点では、各学問分野において個別に展開されてきた「都市史」「都市社会学」「都市地理学」などを横断し、さらに文学・哲学等の伝統的学問も含めて、人文科学を総合した都市文化研究と若手研究者の育成を行なっているが、このような研究組織は他に類例がない。
- 2) 研究教育拠点「都市文化研究センター」の他に、アジアを中心に海外6都市にもサブセンターをおき、国際学術交流を通じて上記1)の研究を進める。しかもサブセンター間の交流も推進して、「都市文化研究センター」を中心とした国際的な研究ネットワークを形成しつつあることもユニークな特徴である。

<本拠点のCOEとしての重要性・発展性>

- 1) すでに14・15年度に学際的な共同研究に取り組むなかで、「都市文化学」という新しい学問分野を確立しつつある。若手研究者も、15年度における課程博士論文提出者数の激増にみられるように、旧来の専門分野の枠を越えて育ち、本拠点を支える新しい担い手となりつつある。
- 2) 豊かな都市文化の創造は21世紀の世界に共通する課題であり、本拠点がめざす新しい都市文化創造へ向けての共同研究は、国際的にもますます重要なものとなっている。

<本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果>

- 1) 研究拠点到整備された設備・資料をもとに、プログラム期間中に学位を取得した若手研究者を新たな担い手として加えて、「都市文化研究センター」における学際的な都市文化研究を継続発展させる。国際学術交流も、本プログラムで行なわれた交流を通じて築かれた実績・信頼関係をもとにさらに進める。
- 2) 15年度より実施された「大阪市立大学重点研究」の長期的な支援を受けて、学術雑誌『都市文化研究』、文学研究科叢書の継続的刊行や、海外研究拠点(サブセンター)の維持をはかる。

<背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等>

- 1) 本拠点は、歴史学において近年もっとも活発な都市史研究をふまつつも、人文科学の広い分野の共同研究を進める点において、学界の動向を先取りするものである。
- 2) 都市文化研究は、全世界に共通する現代の都市問題とも関わって、国際的にも関心が高まっている。
- 3) 都市文化創造へ向けての研究は、大阪市などの都市自治体の文化政策・文化行政にも大きな意義を持つ。

機 関 名	大阪市立大学	拠点番号	D 1 4
拠点のプログラム名称	都市文化創造のための人文科学的研究		

21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、下記のコメントに留意し、当初計画の適切なる変更が必要であると判断される。

(コメント)

世界最高水準の研究教育拠点を実現するために必要な方策が不十分である。強固な意思と明快な戦略、担当者たちの並外れた努力が必要である。

新たな理論やモデルの提示はなされておらず、現段階では世界水準に達した研究成果もほとんど出されていない。質の高い研究成果の公表は、拠点形成の最低の必要条件である。研究成果の質や発表方法の質を高めるために、経費配分の優先順位を検討し直す等により、研究計画を変更する必要がある。

「都市文化学」を新しい学問分野に発展させるという当初の意図は進展を見せておらず、「都市文化学」は依然として曖昧なキーワードのままである。都市文化の世界的な研究・教育拠点となるには、現存する学問分野を基礎に、研究計画を早急に変更する必要がある。現代都市論、現代文化論を無視することはできないし、政治経済との関連抜きに研究を進めるわけにもいかないはずである。サブ・センターの位置づけ、利用法も再検討する必要がある。

英語による公表、英語によるホームページの整備は不可欠だが、充実した内容、適切な英語表現がその前提である。